

平成26年度 第三者評価 評価結果

種別	認定こども園
事業所名称	羽根木こども園
評価機関名称	株式会社にほんの福祉ネット
評価実施期間	平成26年10月20日～平成27年3月31日

〔全体の評価講評：認定こども園〕

No.	特に良いと思う点	
1	タイトル	こども園の教育内容の改善が4年を経て定着し、教育方針と合致した運営となった
	内容	平成19年に認定こども園として開設した東京都第1号の園である。当初は必要以上に保育者主導になっていたのを見直し、大学教授や他の自治体で運営しているこども園運営者にアドバイザーとなってもらい、4年前に着任した現施設長が課題に対して一つひとつ解決に取り組んだ。そのことで職員にも変化が見られ、教育方針の実現、職員の定着につながった。更なる向上心で、今年度は食育の情報収集と、年間を3学期に分けて計画を策定したことで、現状に即した計画となった。
2	タイトル	クラス日誌を「できごと」から、子どもの内面の成長を記録する方法に変えている
	内容	クラス日誌に子どもの個人記録を残している。この記録には、①成長した点、②気になる点、③対応したことへの反応などについて、担当職員の判断で記述することになっている。従来、できごとを記録してきたが、子どもの内面を表現しようと、記録について研修をしたり、施設長が職員会議の場で指導するなど、浸透を図り共有化している。
3	タイトル	子どもたちの自由な発想に基づいた活動
	内容	子どもたちが、日常的に、与えられるのではなく、自分で考えた活動ができる環境がある。時には何をしようか考えあぐねる子どももいるが、友だちの遊びに加わったり考える時間をとったりして、そのうち自分のやりたい事が明確になってくる。何かやろうとした時に、例えば条件が揃わないからできない、という考えではなく「どうしたらできるか」と子どもに投げかけて考えさせ、物事を実現することを簡単に諦めない習慣を身につけさせようとしているのがわかる。問題解決への取り組みは、例えば有事の際に必要な判断力を身につけることにつながる。

No.	さらなる改善が望まれる点	
1	タイトル	子どもの可能性をより引き出す保育の力を伸ばしていく
	内容	園では子どもの自由な発想に基づく活動が主体になっている。自分のやりたい事にこだわるあまり、経験が偏りすぎてはいないかを、そばにいる職員が常に考える必要がある。子どもの持つ力の可能性は無限であり、いつどのようなきっかけで花が開くかわからない。経験が決して偏ることのないように、その子どもにとっては困難な事にも向かって行くことが出来るように、環境を用意できるように、今後も継続して取り組んでいくことを課題としている。
2	タイトル	ホームページによる保護者を対象とした情報発信を一層工夫していく
	内容	職員がホームページの「お知らせ」等を随時更新しているが、保護者を対象としたページが行事報告になっているため、園では改善したいと考えている。各行事では、子どもの完成した姿を評価してしまいがちだが、そこに至るまでの子どもの頑張りや我慢等の姿を可視化したいと検討している。子どもの成長過程を保護者と園で共有することが、子育ての楽しさと園の取り組みの理解にもつながると考えている。現状では職員の作業負担増となるため、教育・保育の可視化の実現に向けて工夫していくことを課題としている。
3	タイトル	食べることに、よりこだわって取り組んでいく
	内容	給食を適温で提供できるように園は努力し、より美味しく食べることができるようになった。また、給食の食材がどのように手に入るのかを知っておくことは興味深いに違いない。クッキング保育で直接食材に触れたり、調理器具を使って調理する経験のほか、調理師が給食に出したサバを子どもたちの前で下ろして見せたり、様々な活動を実施している。今後も、タケノコ1本を皮ごとゆでて、皮むきをする体験など、実体験の充実を一層図っていくことを課題としている。

〔事業者が特に力を入れている取り組み：認定こども園〕

事業者が特に力を入れている取り組み①		
評価項目	1・1・1	認定こども園として目指していることの実現に向けて一丸となっている
タイトル①	園の理念や基本方針の具現化と浸透を目指している	
内容①	園は幼保連携型という新しい仕組みの東京都第一号の園であり、模範も前例もない試行錯誤の中でのスタートであった。保護者のニーズや関わり方も幼保で違いがあるために、園の責任者も職員も保護者も開園当初は戸惑いがあった。積み重ねてきた改善は現施設長になってから成果が表れ、開所から7年、教育環境として落ち着いてきた。保護者の生活スタイルは違っても、自分の子どもの成長が気になるのは同じであり情報は公平に伝えていくというスタンスを通しつつ、手伝い等の協力を求める際には配慮することで、掲げた理念の具現化と浸透を目指している。	

事業者が特に力を入れている取り組み②		
評価項目	6・7・3	さまざまな取り組みにより、業務の一定水準を確保している
タイトル②	ヒヤリハットノートを活用し、事故防止に取り組んでいる	
内容②	毎日、施設長や園長が園内の見回りをし、定期的に遊具点検を実施して、子どもの安全性に配慮している。また、事故とヒヤリハットの定義を明確化し、医療機関を受診したケースは事故として対処している。職員の危機管理に対する意識を高めるため、事故記録帳票とは別にノートを用意し、時間をかけずにヒヤリハット記録を書けるようにして、朝礼で共有化している。	